

プラトン『ティマイオス』における時間の概念

——「永遠を写す動く似像」としての時間についての試論——

田 之 頭 一 知

0 序——イデア論的背景

プラトンの対話篇『ティマイオス』は「自然について」という副題が後世付されたことから推察されるように、この世の森羅万象がどのようにして生じたのかを述べた宇宙論である。この対話篇は後期対話篇に属し、プラトンの哲学思想であるいわゆるイデア論が確立されてそれが展開された『パイドン』『饗宴』などや、さらには『国家』『パイドロス』といった中期対話篇よりも後に位置する。そこでまず、そのイデア論の骨格について簡単に確認しておきたい。

美を例にとるならば、この現実世界の中の美しさは、それがどんなに魅力的な輝きを発するものであったとしても、いつの日にか色褪せてしまうことであろう。あの時はこの世のものと思えないほどの美しさであったのに、今は見る影もないなどということは、往々にしてあることである。この世の中にあっては形あるものすべてが減んでしまうのであって、現実世界すなわち現象界の中の個々の美もまた有為転変に曝されており、やがて美の地位を追われてしまうことになるのである。したがって、私たちはそのような美しさの個々のケースをどれほど知っていたとしても、本当に美を知ったとは言えないであろう。美についての真の知識あるいは認識は、そうした相対的な美のどれとも同じではなく、それから明確に区別される美、個々のケースを超越している美についてのものでなければならない。すべてのケースを含むには、すべてのケースを超えていなければならないのである。そのような超越的な美、個々の美しさすべてを超えて出ている絶対的な美が、〈美〉のイデアである。とすればそれは、この現

象界の美しさの変化に曝され、いわば誕生と死を繰り返すのに対して、常に恒常不変のあり方を保っていないなければならない。私たちが現象界で出会う具体的な美はすべて、この〈美〉のイデアと何らかの仕方に関係することによって、まさに一つひとつの美しいもの、美しい事象であることができると言わなければならないのである。したがって〈美〉のイデアは、理想の美とか普遍概念としての美などではなく、「個々の美しいものをまさに美しいものたらしめている当のもの」として実在する「美そのもの」であると言いうことができる。〈美〉のイデアは、本当に存在すると言えるもの、真実在という位置づけを得るものなのである¹⁾。

それゆえこのような区別はまた、存在と生成の峻別、つまり、「〔真に〕あると言われるもの（＝生成変化しないもの）」と「成りゆくもの（＝生成変化するもの）」の厳格な区別を意味している。今し方述べたように、この現実世界における事物は常に変化に曝されているため、或るときに「美しくある（＝美しい）」ものが、別のときにはもう「美しくあらぬ（＝美しくない）」ものに「生成している（＝変化している）」ということが起こり得る。すなわち、現象界は「生成変化するもの」の世界である。しかもこの現象界における諸事象の特徴は、常に感覚を介して捉えられるという点にある。したがって、プラトンにとっては、「生成変化するもの」はまた「感覚の助けを借りた対象」でもあり、それゆえ現象界の個々の事物は、感覚的諸対象として「生成するもの」であって、厳密には「存在する」と呼ばれ得ないものなのである。とすれば、「真に存在すると言われるもの」つまりイデアは、言うまでもなく生成するものではないのであるから、「常に同一を保つ

もの」であり、したがって単一な形相を持ち、恒常不変、永遠不滅である。このような存在は感覚を手がかりとしては捉えられず、感覚の助けを借りない純粋な思考作用、純粋な知性の働きによってしか把握されないことになる。プラトンにあって「存在するもの」は知性の対象となるのである²⁾。

このようにプラトンは、感覚的事象とアイデア、生成と存在を峻別したのであるが、そのアイデア論において最も大きな問題は、その両者の関係のあり方である。個々の現象的な美は、〈美〉のアイデアと関係することによって、美しいものであることが可能となるわけだが、それはどのような関係なのであろうか。アイデア論確立以来、その焦点となるところは、アイデアと感覚的事象との関係なのである。藤沢令夫によると、プラトンはそれを2つの方式で説明しようとする。一つは感覚的事物がアイデアを分け持つという分有の理論であり、いま一つはアイデアを感覚的事象の原範型とし、感覚的個物をアイデアの似像とするという考え方である³⁾。前者の分有の理論にあっては、たとえば、或る感覚的個物が美しいのは、その個物が美という性質を持っていることによるが、その美という性質はそもそもが〈美〉のアイデアに依拠しているのであるから、感覚的個物は〈美〉のアイデアを分け持つ(=分有する)ことによって美しいと言われることになる。この場合、〈美〉のアイデアは、感覚的な現象美すべてに分け持たれている何かになるが、もちろんその分有の関係は量的なものではなく、質的なものである。後者の場合、原範型としての〈美〉のアイデアと似像としての個々の美しいものの関係は、いわゆるオリジナルとコピー(ないしは本体とその影)の関係になる。この関係において重要な契機をなすものの一つは、言うまでもなくアイデアと個物の「類似性」ないし「類縁性」であり、アイデアという知性的真実在の感覚的像化あるいは像の制作である⁴⁾。そこにはさらに、アイデア的真実在は完全性を備えるが、それを像化した個物はその完全性の点で劣るということ、すなわち劣化あるいは不完全化という契機が含み

こまれている⁵⁾。とすれば、アイデアとその似像(あるいはアイデアとその影)という関係による説明方式にあっては、アイデアが中心となる以上、現象界は何らかの欠点を持ったアイデア界、アイデアの不完全な写しであるという主張へと転化し得るものが含意されていると行うことができる。このように、アイデアを中心に置く彼の思想はいきおい永遠的なものを中心に据えた思想であるがゆえに、時間はまさに時間として捉えられるというよりはむしろ、いわば永遠の相の下に眺められることとなるであろうことは想像に難くない。以上のことを踏まえながら、『ティマイオス』における時間論を見てゆくことにするが、まずはその宇宙生成に対する考え方の骨格を粗描してみたい。

1 宇宙の生成について

先にも述べたように、『ティマイオス』は宇宙生成を扱った対話篇である。プラトン自身は時間を主題にした対話篇を遺していないが、この宇宙論、宇宙生成の物語の中に、時間に関する議論をも盛り込んだのであった。そこで、まずはその宇宙生成論の骨格を見てみる必要があるが、プラトンにとってこの宇宙は自然発生したものではなく、制作されたもの、作り出されたものである。したがって、そこには制作を担当した存在者、制作者(ὁ δημιουργός⁶⁾)がいることになる。この制作者はまさに宇宙の作り手、万有の始原であるがゆえに、創造者としての神とも位置づけられ、またさらに、善きもの(ἀγαθός)とも呼ばれている(29E)。この善きものとしての制作者あるいは神は、できるだけ劣悪なものがなく、すべてが善きものであることを望んで、可視的なものの無秩序な動きの中に秩序を導き入れ(30A)、そして、知性(νοῦς)を魂に結びつけ、魂を身体に結びつけて宇宙の造作をまとめ上げ、そうすることで本性上最も美しく最も善き作品を作り上げようとした(30B)。こうして、「この宇宙は、神の先々への配慮によって、真に魂を持ち知性を備えた生きも

のとして生まれた」(30B—C) ののである。すなわち、宇宙は生きているのであり、魂あるいは知性と身体を持つ一個の生きものである。

その宇宙の身体であるが、その身体とは「目に見えるものとして生み出されたもの」(36E) であって、幾何学的形態——正4面体・正8面体・正20面体・正6面体——をなす4つの物体つまり順に火・空気・水・土——根本的には延長体としての「場」——が基本素材とされる。他方、魂のほうは「そのものとしては見えないもの」(36E) であるが、魂とは、「〈自分で自分を動かすもの〉」(『パイドロス』246A、藤沢令夫訳) のことを言い、言葉を換えれば生命原理がそれに当たる。つまり魂は、自発的にみずからを動かして他のものを動かす原理、すべての運動変化の始原(『法律』第10巻894E—896C参照) を意味しているものであり、この魂の本性が知性なのである。宇宙の魂はまさに魂の本性としての知性であって、宇宙そのものの運動——それも秩序ある動き——は、この宇宙の魂=知性を始原とするであろう。

このようにして宇宙の魂と身体とが制作されたが、しかし、それは言うなれば宇宙の祖型であって、まだそこには星々も個々の生物もない。そこで神たる制作者は、イデア的モデルとしての生きもの、すなわち、知性対象としての「完全無欠な生きもの(τὸ παντελὴς ζῶον)」(31B) を制作モデルとして、4つの種族を生み出した。「天の種族」「翼を持ち、空中を飛翔する種族」「水棲族」「陸棲の歩行する種族」(39E—40A) がそれである。このうち、天の種族は恒星と惑星すなわち天体のことで、この天の種族のみが、制作者としての神の手になるものである。そのため、諸天体はまさしく神祕的(θεῖον) な種族として位置づけられ、神々と呼ばれている。つまり天体は、制作されたものであるがゆえに始まりを持ち、その点では完全なる永遠存在と言えないかもしれないが、しかし制作者たる神によって不死なるものであることが約束されているのである(41B)。こういう言い方が許されるとすれば、宇宙そのものの制作者

たる神は第一の神、天体は第二の神なのである⁷⁾。これに対して、残りの3つの種族は死すべき定め(種族とされ、人間のいわば転生として生み出された)とされる(91D—92C)。

さて、その人間であるが、制作者たる神は、人間の魂を、それもその本性たる知性を有する部分を、純度が劣るかたちで制作したが、そこから先の作業は、制作者としての神ではなく、天体としての神々に委ねられる。つまり人間にあっては、魂の本性たる知性は第一の神に由来するが、魂のその他の部分と肉体は、第二の神によって制作されたものなのである。ところで宇宙の魂とはまさに知性のことであったが、『国家』第4巻や第8巻で主張されたように、人間の魂は知性の他に欲望と気概をも有している。人間の魂は宇宙の魂とは異なり3つの部分から成り立っているものであって、まず宇宙の魂と同質の知性を有する理知的部分、次に勇気に代表される気概の部分、そして食欲や性欲に代表される欲望的部分に分かれる。このうち理知的部分は、神によって作られた知性を持つがゆえに神祕的なものであり、その点で不死なるものに属するが、この部分はそのいわば伴侶となる恒星へと割り当てられ、さらに惑星へと蒔かれて、肉体と魂の残余の部分つまり欲望や気概に代表される部分が形成されることとなるのである。この段階で形づくられる魂の2つの部分は、死すべき種族とされるが、そういうことは、肉体を持った存在者として生きてゆかなければならない人間、死すべきものとして生きなければならぬ人間にとってやむを得ない事柄であるとされている(41A—42Eおよび69C—72D参照)。

このように、プラトンの考える宇宙は一個の生きものとして制作された宇宙であり、生きているがゆえにみずから動いている。この運動の源泉が宇宙の魂と呼ばれるものであって、それはほかならぬ知性のことなのである。そして人間も、純度が落ちるとはいえ、知性を持ったものとして制作されたのであるから、宇宙の知性的運動こそが、私たち人間の思考の動きなし

働きを矯正するモデルとなると考えられる。この点では、宇宙がいわゆるマクロ・コスモス、人間がミクロ・コスモスの関係にあるとすることができるだろう。

2 今の連続としての時間

以上のような宇宙生成の骨格を踏まえたうえでプラトンの時間論を考察してみたい。ただここで断っておきたいのは、私たちが行なうのは、『ティマイオス』の西洋古典学的あるいは文献学的検討ではなく、時間論的立場に立って見たときのプラトンの位置、その時間論的な立ち位置の検討である。それをあらかじめ記したうえで、彼の言葉を聞いてみたい。すなわち制作者としての神は、宇宙が生きて動いているのを認めると喜び、その制作物としての宇宙をかの制作モデル（τὸ παράδειγμα, 原範型）により一層似せようと考えたと語られたあとで、次のように述べられる。

「さて、制作モデルそのものはまさに永遠なる生きもの（ζῶον αἰδίον）であるので、神は万有のほうもできるかぎりそのようなものに仕上げようと努めた。ところで、かの生きものの本性は永遠なもの（αἰώνιος）であり、生成物（τὸ γεννητόν）にそれを完全に付与するのは不可能であった。だが神は、何か永遠を写す動く似像を作ろうと考え、宇宙（οὐρανός）を秩序づけると同時に、一のうちにとどまっている永遠（αἰών）について、数に従って進んでゆく永遠的似像（αἰώνιος εἰκών）を作ったのであり、この似像こそ、私たちが時間と名づけてきたものなのである。というのも、昼も夜も、月も年も、宇宙が生じるまではなかったのであって、宇宙が構成されると同時に、神がそれら昼や夜などの誕生を案出したからである。それらはすべて時間の部分（μέρη）であるし、「あった」も「あるだろう」も時間の種（様相、εἶδη）として生み出されたのであって、これらの種（様相）を私たちは、永遠なる存在（ἡ αἰδιος οὐσία）に対して知らず知らずのうちに誤って用いているのである。実際、私たち

はこの永遠なる存在が、あったとも、あるとも、あるだろうとも言うが、しかし、正しく言えば、そういう存在にはただ「ある」だけがふさわしく、「あった」や「あるだろう」は、時間において進んでゆく生成（ἡ γένεσις）について語られるのが適切なのである。——というのも、この2つ〔＝「あった」と「あるだろう」〕は動きだからであって、動くことなく常に同一を保つものは、時間が経って年をとることとも、より若くなることとも関係がなく、また、かつてそうだったこととも、今そうなってしまっていることとも、これからそうあるだろうこととも関係がないのであって、総じて、感覚領域の運動体に生成が付与するものと何一つ繋がりを持たないのである。むしろ、それら〔＝「あった」「あるだろう」など〕は永遠を模倣し、数に従って円運動する時間の種（様相）として生じたのである。」（37C—38A）

このようにプラトンは、時間は宇宙が構成されると同時に作られたと考えているが、その時間論、あるいは時間制作論とでも呼び得るものにあって、核心部分をなしているのは、時間を「永遠を写す動く似像（εἰκὼν κινητὸς αἰώνος）」と見るという点である。つまり、時間は永遠と類縁性を持っているという認識あるいは確信が、その時間論の土台には横たわっている。

それゆえ、この永遠と類縁性を持つ時間ということの意味を考えてみなければならぬが、しかし、プラトンの哲学思想あるいは宇宙論の骨格を或る程度知っていたとしても、この見解は、現代に生きる私たちには、にわかには理解し難いものである。というのも、私たちにとって時間と永遠は対極にあると言ってよいものだからである。たとえば、人間は死すべきものである、あるいは、この世のものは必ず滅びるなどと言う場合、私たちはそのようなことが起きるのは、この世のものが時間の中にあるからだ、と考える。すなわち、時間の中にあるものはすべてその始まりの時と終わりの時を持ち、始まりがあれば必ず終わりがあると感じ取っている。この場合の時間は生成消滅の場とし

ての時間であり、存在者は時間の中にいるがゆえに、有為転変に曝されることとなる。これに対して、永遠には始めと終わりがなく、というのが私たちの素朴な感触である。そのため、時間と永遠は水と油の関係にあり、両者の間には埋めることのできない深い溝が走っていると私たちは考える。とすれば、永遠は生成変化の一切から、したがって時間から隔絶していることとなろう⁸⁾。それゆえ、そのような永遠を時間において実現することは不可能であり、むしろ逆に、それだからこそ人間は永遠に憧れ、何とかして時間を超越しようとする、というのが現代に生きる私たちのいわば常識的な捉え方である。人間は時間に繋ぎ止められており、時間は人間が乗り越えられない限界をあからさまに示すものなのである。とすれば、プラトンの見解は私たちの常識を完全に裏切るものとなっている。

もっとも、時間を生成消滅の場あるいは有限性のしるしと捉えることは、見方を変えれば、時間を事物の変化や出来事のプロセスの始めと終わりを画するものと捉えることでもある。それゆえ時間は、そういう変化や出来事に楔を打ち込むことによって、それらを構造化あるいは組織化することを支えてくれる。プラトンは昼や夜、月や年を「時間の部分」と呼んでいるが、これは時間が単位を持つということの意味しており、そういった部分すなわち単位があることによって、私たちは対象を時間的に構造化し組織化することが可能になるのである。実際、今日の言い方を用いれば、昼と夜が交替することで一日が形成され、そして30日ないし31日によって一月が形成され、それが12集まると一年が形成されるというふうに、時間の部分はお互い同士が緊密に関係づけられているので、時間それぞれ自身が組織化されていると言ってよく、それゆえ時間は日付を持つこととなり、それによって、時間において生起する事象もまた組織化されることになるのである。すなわち、そこに順序構造とでも呼び得るものが確立されることになる。この観点に立てば、プラトンの時間の捉え方は私たちの捉え方と通ずるところがある。

では、この時間の部分ないし単位がどのようにして生じてきたのかと言うと、それは言うまでもなく天体の運動なかんづく太陽と月そして地球の間にある運動の関係による。プラトンもまた、制作者としての神が時間の誕生に対して抱いていた考えから、「太陽と月、そして放浪する星（惑星）という呼び名を持つ他の5つの星が、時間の諸々の数の区分と見張りのために生み出された」（38C）と述べたうえで、これら諸天体は円軌道上に置かれて回転運動を行なうとされ、それによって昼、夜、月、年がまさに時間の部分として生じたと述べている。すなわちプラトンは、昼と夜は「単一で最も知的な円運動の周期」であり、「月が自分の円を一巡して太陽に追いつくときには暦月」が、また、「太陽が自分の円を回り終えるときには暦年」（39C）が生じると語る。要するにこの諸天体は、「協力して時間を作り上げなければならなかった」（38E）のである。太陽、月そして惑星（水星・金星・火星・木星・土星）が、互いに一定の関係を保つ周期で円軌道を描きながら回転し、それによって、昼と夜の規則的な交替が形成され、月と年という時間の部分あるいは単位が形成されるのである。その場合、「時間の諸々の数を区分し見張る」ということは、このような時間の部分が生じることによって、生成現象の時間の幅つまり時間量が明確にされ、それら時間の部分が相互に関連し合うことによって、生成現象が組織化されるということの意味していると考えられよう。したがって惑星は「時間の器官（ὄργανα χρόνων）」（41E）と呼ばれることとなる。それゆえ、時間を作り出すということは、畢竟、さまざまな周期で円軌道上を動く天体の回転運動を作り出すことにほかならない。とするならば、宇宙を作り出した制作者としての神は、時間を作るにあたって、それが「永遠を写す動く似像」となるべく、円軌道上を動く回転運動として時間を作り出したことになる。この場合、惑星の運動が円を描くという点、円軌道上を運行するという点が重要である。というのも、このような円を描く回転運動は当然、宇宙の魂を始原とす

る運動にほかならないが、プラトンにとって魂は、それもとりわけ知性は、回転運動を行なうものと考えられているからである⁹⁾。ここで、或る一点から始めて円を描く場面を考えたとき、もちろん始点と終点は重なるが、円は中心から円周までの距離がすべて等しい図形であるため、円においては、円周上のすべての点が一様に始めであるとともに終わりであると言うことができる。つまり円周上のどの点も同じ資格で、始点かつ終点となる。これは或る意味で始めも終わりもないということに等しい。したがって、円は始めと終わりがなく永遠を象徴するものと考えられることができる。とすれば当然、球形も永遠と関係づけられるであろうし、また球形こそ、「すべての形のうちで、最も完結し、最も自分自身に相似した形」(33B)、一様にして完全な図形であると言うことができるだろう¹⁰⁾。このように考えたとき、魂を持つ生きものとしての宇宙は、知性を始原として永遠性を象徴するであろう回転運動を行なう球体としての宇宙(34B参照)となるであろうし¹¹⁾、宇宙と同時に制作された時間は、運動という相から眺めれば、天体が円軌道を描くという点に、永遠との関連性を認めることができよう。

したがって、今述べた観点に立てば、惑星の回転運動によって生み出される時間、より正確には時間の部分である昼・夜・月・年の間には、何らかの数的関係が恒常的に存在することとなる。なるほどその関係の具体的数値は変化するかもしれないけれども、一定の関係がそこにあり続けるということに変化はない。永遠性を象徴すると言ってもよい一定の円運動を行なう惑星間の関係に一定の数的関係が認められ、それが恒常的なものとして時間の部分を規定しているのである。まさしく第一の神としての制作者は、「万有が、永遠なる本性(ἡ διαίωνα φύσις)を模倣するという点で、あの知性対象たる完全な生きものに、できるかぎりよく似るため」(39E)に、第二の神々としての惑星を制作し、それと同時に、宇宙の魂たる知性の活動の現われとして、その回転運動をしつらえたのである。昼や

夜、月や年が単独で永遠の似像となっているのではなく、太陽の(あるいは天球の)日周運動によって昼と夜が規則的に交替し、さらには、太陽がその回帰する年周運動を行なうことによって、今日の言葉で言えばまさに日付という時間の部分間の関係を示すものが生じ、その日付が無限に回帰し、進行するというところに、永遠との類縁性を認めることができるであろう。その点で、コンフォードの言葉を用いれば、「周期は、それがどんなものであれ、時間の各時点における始まりと終わりである。この絶えざる回帰は、……可視的世界が、不変のモデルの永遠なる持続に対してなし得る最短のアプローチなのである」¹²⁾と言えよう。

さて、時間の部分がどのような意味で永遠と類縁性を持つのかを見てみたが、それはあくまでも原理的な面での話であって、その時間の部分が実際にどのような働きをし、それが現に永遠と類縁性を持つかどうかはまだ問われていない。ここでその点を考えなければならないが、日付を持つ時間(暦としての時間)、つまりは時計の時間は、私たちの日常生活になくなくてはならない時間であり、先ほども簡単に述べたように、時間において生起する対象の構造化や組織化、総じて順序構造を可能にするものである。別の言い方をすれば、日常生活においては、時間と時計(あるいはカレンダー)は不離不即の関係にある¹³⁾。たとえばスケジュールを作って何らかの計画や予定を立てるには、あるいは、生活設計をして人生の青写真を思い描くためには、つまり、みずからの生を仕立てあげ、組織化してゆくには、時計(およびカレンダー)が必要不可欠である。私たちがみずからの生を営んでゆく際、時計や日付を参照枠とすることによって、時間の使い方が割り振られてゆくのである。予定の時刻までまだ30分ほどあるから、本屋にでも行ってみよう、ということになるわけで、時計の時間を目安とすることで、私たちは自分の振る舞い方を決めている。その点で、時間は私たちの振る舞いによって染め上げられてゆくもの、何らかの行為を選択することによって費やされるものであり、

この意味で、時間を按配することが日常生活の根幹をなしているのである。ここで大切なことは、私たちの日常は知人あるいは他人との共同生活の基盤のうえに成り立っているということ、時計の時間は人々が大なり小なり共同生活を営むうえで、複数の振る舞いをすり合わせる基準値を提供するものとして機能しているということである（たとえば電車の時刻表がその典型である）。裏を返せば、私たちは必ず時計の時間に合わせて日常生活を営んでいるのであり、私たちはこの世に生を享けてから、日付を持つ時間の外に出たことはない。このことが意味しているのは、社会生活における人々の多様な振る舞いの結節点に、時計の時間ないし日付を持つ時間が位置しているということである。時計とは或る共同体ないし社会に属する人々の振る舞いの最大公約数、つまり常識的な行為のスタイルを割り出す装置となっているのであって、何らかの時計が存在しない社会や共同体は考えられない。この意味で、日付を持つ時間、時計の時間は、私たちの振る舞いのあり方を規制し、こう言ってよければ、その一連の振る舞いを順序づけて組織化する役割を担っている。

このように、天体の運動に基づいた「時間の部分」が、複数の振る舞いを調整して組織化するための指針として、時計や日付を提供しているとするならば、それは無限に回帰し進行するものを、私たちの振る舞いの参照枠とするという意味に解することが可能となるだろう。とすれば、先ほども触れたように、12時という時刻、6月という月は無限に回帰し、2007年の次は2008年、2009年というふうに無限に進行してゆくのであるから、このような絶えざる進行・回帰を参照枠とした行為の割り振りは、まさに“今”の連続となると言えよう。実際、私たちはカレンダーなどに自分のスケジュールを書き込んでゆくが、そのスケジュール表の中には過去も未来も存在せず、また、いわゆる歴史の年表の中にも同じように過去や未来は存在していないのであって、スケジュール表や年表に示されているのは、日付の連なりとそれを染め上げている振る舞い

の連なり、出来事や行為の順序ないし継起の構造なのである。そこでは或る日付と別の日付が並列されて同時に存在し、或る年と別の年も同じように同時に存在する。また、或る一日が今日と呼ばれ、同様にして或る7日間が今週、或る30日ほどが今月、或る12ヶ月が今年と呼ばれるのである。そして、或る人の一生と言う場合、日付を持つ時間にあっては、その人の人生全体が一まとめにされて捉えられる。この意味でそこには今の連続、こう言ってよければ、“より先の今”と“より後の今”しかなく、少なくとも時間様相としての過去と未来は見いだせない。まさに過去—現在の重層的な構造が欠落しているため、今の連続継起としての線の構造（あるいは円環構造）しかないのである¹⁴⁾。このようないわば果てしなき今の連続としての時間は、なるほど「永遠を写す動く似像」という点から見れば、その果てしなさのゆえに永遠を写し取っていると言えなくもないだろう。とはいえ、そのような今の連続は果たして正当に時間と呼び得るものなのであろうか。時間ということが語られる場合、そこにはやはり過去と未来——そして現在——という時間様相が求められるのではなかろうか。実際プラトンも、「あった」も「あるだろう」も——つまり、過去も未来も——時間の種（様相）として生み出されたと語っている。この2つの時間様相はどのように永遠の似像としての時間と関係するのだろうか。最後にこの点を考えなければならない。

3 過去と未来

先ほど引用した個所にも見られるように、プラトンは「あった」および「あるだろう」を、永遠を写す動く似像たる時間の種（様相）と捉えているが、同時にまた、この2つの種（様相）は動き（κίνησις）であって、時間における生成について用いるのがふさわしく、永遠存在に対して用いることは誤りで、それには「ある」だけが適切だと主張されている。ここから分かる

ことは、「あった」「ある」「あるだろう」という言い回しを、単なる時制や語りの問題としてではなく、まさしく時間様相に属する事柄として捉えるならば、現在（ある）と過去（あった）および未来（あるだろう）との間には、落差があるということである。現在・過去・未来は同一平面上に並ぶのではなくて、差異がそこに設けられている。プラトンの見解をそのまま時間様相の問題として捉えれば、永遠なる存在には現在が、そして、生成には過去・未来が割り振られ、また、前者には過去・未来が、そして後者には現在が拒絶されることとなるのである。とはいえ、この見解もまた何かにわかには理解し難いものを含んでいる。そもそもこの時間の「種」というのは一体どのような意味なのであろうか。それについては、プラトンの次の言葉が重要な示唆を与えてくれる。

「それはともかく、時間が宇宙とともに生じたのは、両者は一緒に生じたのだから、何か解体ということがいづか両者に生じるならば、一緒に解体されるようにというためであるし、また、時間が永遠なる本性（ἡ διαίωνία φύσις）を制作モデルにして生じたのは、宇宙ができるだけこのモデルに似たものであるようにというためである。というのも、制作モデルのほうは永遠全体にわたってあるものなのだが、宇宙のほうは、全時間にわたってずっと、あったもの、あるもの、あるだろうものだからである。」（38B—C）

ここには永遠と時間の対比が述べられているわけだが、永遠と時間の関係は、原範型と似像の関係にあるため、そこには劣化ないし不完全化という契機が含まれているはずである。それは、制作モデルに永遠性が付与されて「ある」と語られるのに対して、そのモデルに則って制作された宇宙には時間が割り当てられて「あった、ある、あるだろう」と語られる点に認められよう。したがって、宇宙に対して用いられる「あった」と「あるだろう」が永遠なる制作モデルからの劣化を示すとともに、両者に共通して使われている「ある」も、当然同じ資格で用いられてはいないはずである。

とすれば、宇宙について語られるこの「ある」の意味を明確にする必要がある。そこで、まず指摘しなければならないのは、この宇宙は完全な意味での永遠存在ではないということである。宇宙は——時間とともに——生み出されたのであるから、そこには始まりがあり、したがって、最終的には解体が、つまり、終わりが生じることとなる。宇宙は制作されたがゆえに始まりを持ち、また解体される可能性を持つがゆえに終わりがあるのである。しかしながら、その始まりの時から終わりの時へと続いてゆく時間経過の全体を見るならば、つまり「全時間にわたって」というスタンスで考えるならば、宇宙は常に存在し続けている。宇宙そのものは永遠存在ではなく生成物であり、有為転変に曝されてはいるけれども、その始まりと終わりの間の全時間にわたっては、そのようなものとして“あり続ける”のである。とすれば、時間が解体されるまでという条件つきではあるが、宇宙に永続的持続ないし半永久的持続が認められねばならない。したがって、時間が宇宙とともに生じたということは、そのような持続における永続性を、宇宙が事実としてではなく権利上の問題として所有しているということを意味していると言えよう。つまり、制作者としての神からこの宇宙はその永続性を保証されているのであって——先ほども述べたように、諸天体は永遠なるもの、完全に不死なるものではないが、しかし、神によって不死が約束されている（41B）——、それ自体としてはやはり終わりが刻印されていると言わなければならない。これに対して永遠は、いかなる持続も所有してはいないはずである。というのも、永遠に持続の相を認めるならば、そこに始めと終わりが忍び込む余地を認めることになるだろうからである。プラトン流の言い方をを用いれば、永遠は「ある」としか言えないものであり、「あり続ける」とは言えないはずなのである。この持続の相を示すのが宇宙であり、その持続の分節化が「あった」「ある」「あるだろう」というかたちになって表明されていると言ってよい。すなわち、宇宙の始まり

の時からそれは「あった」のであり、そして、今もそれは「ある」のであり、その終わりの時まで「あるだろう」と言うことができる。宇宙はあり続けるものとして作り出されたのであり、宇宙が存在し始めるやいなや、宇宙の有りようはいろいろに変化し生成に曝されてはいるけれども、宇宙そのものの持続的存在は確保されているのであって、この持続的存在を支えているのが、ほかならぬ時間なのである。永遠という完全なるものに比べれば、時間は作られたものであるがゆえに始まりと終わりを内包しているが、その範囲の中では永続的持続性を支える根拠として機能する¹⁵⁾。これが「永遠を写す動く似像としての時間」の根本的な意味内容であると考えてよい。そしてそのいわば現象的な現われが、今の連続としての時間なのである。

しかしながら、この「あった・ある・あるだろう」は、「過去・現在・未来」を表示しているのだろうか。この宇宙は1億年前も存在していたし、今も存在しているし、1億年後も存在しているだろう、という言い方は、宇宙の過去と未来についておそらく何も語ってはいない。繰り返しになるが、宇宙の永続的持続を言い換えたにすぎない。これは前節で述べた今の連続としての時間のいわば典型的な表現方式である。すなわち、そこには物事の順序が示されているだけである。したがって、そのような時間にあっては、こういう言い方が許されるとすれば、絶対的な始まりも終わりもないことになる。この宇宙が「或る時」制作者たる神によって作り出されたとするならば、その「或る時」は、宇宙（および時間）の始原であり、この世界の絶対的な始まりでなければならぬ。「それ以前」をもし考えることができるとすれば、それはこの世界とは異なる宇宙や世界が存在していたということを意味するであろう。したがって、プラトンの言う時間が“今”の連続でしかないならば、制作者による宇宙の始まりは、ただの区切りとしての始まりにすぎないことになる。とはいえ、やはりプラトンはこの宇宙が或る時に絶対的に、あるいは少なくとも、確実に、存在するこ

とを始めたのだと考えているように思われる。別の言い方をすれば、時間がたとえ永遠を写す動く似像であるとしても、それは言うなれば永遠の亜種としての時間ではなくて、まさに時間の時間たる所以がそこにあると語られているのではなからうか。原範型の永遠から見ればその似像たる時間は不完全であるかもしれないが、しかしその不完全さがまさしく時間の肯定的な制作根拠あるいは存在意義になっているのではあるまいか。もしそうであるならば、プラトンの時間の捉え方の中に、時間の区切りや今の連続ではなくて、過去と未来の生成を読み取ることができるはずである。最後にこの点の見通しを示してみたい。

さて、前節で示したように、プラトンの考える時間は、天体運行に基づき、昼・夜（すなわち日）、月、年といった時間の部分つまり単位を持つ時間である。これは永続的持続性を支える時間なのであるから、事物や現象の持続的推移に対して楔を打ち込み、それによって前後関係を確定して変化を明確化する働きを持っている——これが「あった」「あるだろう」が動きであると言われていることの意味である——。しかしながら、それは現象としての変化の明確化つまり順序の確立であって、本質的な部分での変化を意味するものではない。見かけは変化するが、その事物の本性は変化していないということ、あるいは、そのものはそのものとして存在し続けているということを読み出すために、天体運行に基づいて諸事象の推移を分節化するのである。2006年と2007年とでは、あるいは紀元前5世紀と21世紀とでは、前者が前年あるいは以前、後者が今年あるいは今世紀として位置づけられてそこに前後関係としての順序が確立されているが、その順序を貫いて、宇宙は宇宙として存在し続けている。あるいはまた、美しいものはいろいろに誕生し、消滅していったが、また、美の尺度とでも呼べるものは時代時代でいろいろに変化したかもしれないが、そのような変化あるいは現象美の多様性を貫いて、美を美たらしめている何ものかは、変わることなく恒常的なあり方を保

っている。このような本性上の不変性や同一性をこそ炙り出すために時間が存在しているのである。したがって、もしそうであるとすれば、かえってそこには変化に対する鋭敏な意識が要請されることになる。現象の変化が多様であればあるほど、本性上の不変性やそのものとしての存続性が際立ってくると言うことができるだろうからである。とすれば、そこには変化の受け皿のようなもの、多様な現象の比較を可能にする枠組みが必要になるはずである。

この観点から見たとき、日付や時刻——とりわけ日付——の持つ意味、それは“時間枠”の設定であると言うことができよう。さまざまな現象は、この枠組み、たとえば2006年と2007年あるいは紀元前5世紀と21世紀という枠組みを設定することにより、比較が可能となる。順序を決定するとはこの時間枠を確定することなのである（年表とかカレンダーはこの枠組みそのものを提示している）。これが前節で述べた今の連続としての時間の実質であり、この意味では、「あった・あるだろう」は、過去と未来という時間の様相であるよりはむしろ、時間の形式と言ったほうがよい。とはいえ、時間枠を設定し、相互の間の比較が可能となったとき、そこには或る意味で絶対的な変化が認められるはずである。それは順序を確定することによって生まれてくるもの、時間枠を設定することによってしか生まれてこないものであり、それが過去だと考えられる。つまり、2006年は2007年の前の年であり、この順序は時間枠の設定で確立されるが、この枠組みの設定により、去年と今年は違う、という意識が醸成され、この意識によってはもはや去年には戻れないということが確定されるのである。日付を持つ時間としては2006年と2007年は並列されたにすぎないが、つまり、同時的に存在するが、その2006年が過ぎ去ってしまってもう後戻りのできない年として、2007年という年の奥底にいわば沈み込んでゆくことにより、2007年が現在として浮かび上がり、そこに過去—現在の重層的な関係が築き上げられることとなる。過去はそれ自体として存在する

のではなく、そこへはもう戻れないという意識があっではじめて過去たり得るのである。また、未来については、たとえば明日の天気は予測することはできるが予知できないものであるのとまったく同じ意味で、2008年は、これからやって来る、先回りして知ることのできない年として、2007年を迎え入れる。そうすることで、2007年に対して可能性の領域が開けてくる。このように、過去は意識のありようによって規定され、未来はそこに意識を向かわせることによって開けるのであって、その点ではともに人間的なものなのである。翻ってプラトンの時間は、永遠を写す動く似像であるがゆえに、そこには永遠からの劣化があり、不完全なものが忍び込んでいる。つまり、永遠との類縁性を示すとともに、永遠との差異性を示すものが時間には含まれている。前者は永続的持続性に求められるが、後者は過去と未来の現出契機を持つという点に認められるのではあるまいか。永遠からの逸脱、それが過去と未来というかたちをとって析出されるのではなかろうか。このように考えれば、プラトンが「あった」「あるだろう」は、時間における生成について語られるのがふさわしく、ともに動きであるとした点も理解されよう。裏を返せば、時間を永遠との関係で考えるのではなく、時間を時間として眺めるならば、まさに過去と未来がそこにあるということが時間を時間たらしめている、ということなのである。

このことを別のかたちで示せば、プラトンの言う「あった」ものは「もはやない（あらぬ）」ものへ、また、「あるだろう」ものは「いまだない（あらぬ）」ものへと反転し得るということである。時間はこの意味で非存在の領域と踵を接している。こういう言い方が可能であるとすれば、時間は無を分泌するのである。ただし、この非存在あるいは無の分泌が可能となるためには、永遠という視点から別の視点へと移動することが条件となる。それは現在という時間様相への立脚である。「もはやない」「いまだない」という言い方は、現在という時間様相に立つことによってはじめで可能

となるのである。プラトンが用いている「あった・ある・あるだろう」という言い方は、過去・現在・未来を通して変化しないものがあることに着目した言い方——昔も今もこれからもという形——であり、その眼差しは永遠へと向けられている。しかし、時間は制作されたものである以上、始まりと終わりを内蔵しており、それゆえにこそ過去と未来が生まれてくる。とすれば、過去と未来は作り出されるもの、制作されるものであると言っても過言ではないであろう。永遠という観点から見れば不完全さを見せる時間、いわば劣化した永遠である時間も、過去と未来というそれ独自のものを手に入れることにより、時間として完成されるのである。時間は永遠へと限りなく接近することはできるかもしれないが、永遠へと到達することはできない。その不完全さはしかし、現在への立脚によって過去と未来の制作可能性を呼び込むのであり、永遠との隔絶は時間独自のものの制作可能性へと転化されるのである¹⁶⁾。プラトンの考える「永遠を写す動く似像としての時間」は、永続的持続という点に永遠との類縁性を見て、時間を今の連続として捉えていると言ってよいが、その“今”は、過去と未来が制作されることによって、まさしく“現在”という時間様相として確立されることになると言えるのではあるまいか。このように考えるならば、プラトンの時間論は、過去・現在・未来という時間様相の成立可能性を囚らずも模索した時間論であると言うことができるように思われる。そして、中でも現在という時間様相に焦点を当てたとき、そこにはまたプラトンとは違う永遠へのルートが開けてくることになるだろう。しかしそれはもはやプラトンの与り知らないことなのである。

註

本稿執筆にあたって用いたプラトンのテキスト関連の文献は以下のとおりである。

テキスト

J.Burnet, *Platonis Opera*, tome IV, Oxford Classical Texts, 1902

対訳、注釈等

A.Rivaud, *Timée, Critias*, in: *Platon, Œuvres complètes*, tome X, Les Belles Lettres, 2002

Th.H.Martin, *Études sur le Timée de Platon*, Texte grec, traduction française, longues notes et dissertations sur l'Atlantide, l'âme du monde etc..., Vrin, 1981 (reprise de l'édition de 1841)

R.D.Archer-Hind, *The Timaeus of Plato*, Edited with introduction and notes, Reprint ed., 1988, Ayer (1st ed., 1888, Macmillan)

A.E.Taylor, *A Commentary on Plato's Timaeus*, Oxford, 1928

F.M.Cornford, *Plato's Cosmology*, The *Timaeus* of Plato translated with a running commentary, Routledge and Kegan Paul, 1977 (1st published 1937)

翻訳

B.Jowett, *Timaeus*, Macmillan, 1985 (reprint of the 3rd ed. of Jowett's translation, 1892)

種山恭子訳『ティマイオス』(岩波版『プラトン全集12』) 1975

なお、本稿において『ティマイオス』以外の対話篇の邦訳はすべて岩波版のプラトン全集による。

- 1) 最も一般的なアイデアの規定とも呼べるものがあるとするれば、それは“Xとは何であるか”という問いに対して、“まさにXであるところのもの”“XをXたらしめている当のもの”と言い得るような何かであり、それはすなわち、「〈まさにそれであるところの、そのもの〉という刻印をおす、すべて」(『パイドン』75D、松永雄二訳)ということになるだろう。このことは、「われわれが同じ名前を適用するような多くのものを一まとめにして、その一組ごとにそれぞれ一つの〈実相〉(エイダス)というものを立てる」(『国家』第10巻596A、藤沢令夫訳)ということの意味している。しかし、このような規定や態度はあまりにも範囲が広すぎてしまい、いわばこの世に存在するすべてのものに対してアイデアがあるという議論を招きかねない。周知のようにプラトン自身もそれに気づいており、『パルメニデス』では、人間やさらには泥などにもアイデア(形相)があるのかどうかということが問われているが(130B—D参照)、実際アリストテレスは、アイデア論を批判するに際してそういった点に批判の矛先の一つを向けている(『形而上学』第1巻第9章参照)。要するにプラトンのアイデアは、感覚的事物に「それ自体」だとか「そのもの」だとかいう言葉を付け加えたにすぎないというような批判を招きかねないわけであるが、しかしその議論が、〈美〉および〈善〉のアイデアを中心に展開されている点には注意が必要である。すなわち、プラトンは価値領域にアイデアのアイデアたる所以を求め、存在者をあらかじめ価値的に染め上げられたものとして取り扱おうとしており、存在者の本質部分に価値を見ていると言うことができるように思われる。アイデアは絶対的超越的価値規範として実在すると言うことができるであろう。

2) ちなみに『ソピステス』では、「われわれは、身体により、感覚を通じて、〈生成〉と関わりを持ち、他方、魂により、思惟を通じて真の〈實在〉と関わりをもつ」とされ、「その〈實在〉はつねに恒常不変のあり方を保つのであるが、他方〈生成〉は刻々に変転するもの」(248A、藤沢令夫訳)とされている。なお、プラトンは『パイドロス』で、現象界の外、つまりこの宇宙の外側に、アイデア界と呼ばれるアイデアの座する世界があるとミュートスを用いて比喩的に語ることによって、アイデアが知覚可能なものではなく、純粋な知性対象、厳密な思考対象であることを示している(245C—248B)。実際この宇宙は、それがどれほど広大なものであろうとも、感覚的世界であるかぎり原理的に経験可能なものであるのに対して、その外部は経験を超越しているがゆえに、まさしく思考されるしかないからである。

3) 岩波版『プラトン全集3 ソピステス ポリティコス(政治家)』の「ソピステス解説」を参照。ちなみに、分有による説明方式は『パルメニデス』において吟味の俎上に載せられ、さまざまなアポリアが析出される。

なお、『ティマイオス』そのものには、『饗宴』や『国家』『パイドロス』に見られるようないわば絢爛たるアイデア論を前面に押し出した箇所はないが、その議論は明らかにアイデア論的構造を示している。この点に関してたとえばアーチャー・ハインドは、存在論的な視点から、『ティマイオス』ではアイデアの原範型的側面が前面に出てきているのであって、その場合、アイデアは物質的なものすべてのモデルとなる永遠にして非物質的な類型(types)であると述べている(R.D. Archer-Hind, *The Timaeus of Plato*, pp.31-32)。そしてまた、アイデアは対象の真なる知識を保証するものでもあるがゆえに、認識論的な立場からも眺め返され、何が人間の知識の領域であるのか、どんな種類の知識が到達可能なかという点に関しては、『国家』と『パイドン』が執筆された後に多少なりともプラトンの態度は変化したと考えている(*ibid.*, p.48)。

4) Ashbaugh は原範型—似像の関係について、『ティマイオス』を参照しつつ次のように考えている。すなわち、原範型はそれ自体でそのものとして実在するものであって不変の存在を持ち、生じることも滅びることもなく、それゆえ常にあるが、他方、物理的諸対象は、常に生成しつつあり、けっして真に存在しているわけではないがゆえに、みずからが似ている知性的諸事物との兼ね合いでしか説明され得ない。物理的諸対象は諸々のアイデアの名前を分け持ち(share)、知性的諸対象つまり諸形相の似像・模倣・コピーといった位置づけになるのである。とすれば、知性的形相は原範型として、「部分」や「対応物」を持つこととなり、物理的諸事物が影を投じると同じように、物理的像を投じる(cast)ことになる。その場合、似像は原範型の諸性質すべてに似てはいるけれどもその諸性質全部を持っているわけではないので、その像は、眼に対して不在であるものを呈示するために、「自分がそれではあらぬところの何かになる」のである(A.F.Ashbaugh,

Plato's Theory of Explanation: A Study of the Cosmological Account in the Timaeus, State University of New York Press, 1988, p.9)。つまりAshbaughは、似像におけるアイデアそのものの不在こそが、かえって生成現象全体を統括するアイデアを照らし出すことになるのであるから、原範型—似像という説明方式をとることによって、現象界の移ろいゆく諸事象に関して、その生成の根底に単一なものを認めることが可能になり、したがって、多様な生成現象の統一性を説明することができるようになると考えていると言ってよいであろう。このように、現象界を像の世界と考えることでアイデアの実在性が浮き彫りになるが、実はそれが逆に現象界の存在意義を確固としたものにして炙り出すと行うことができるのではなからうか。なお、『ティマイオス』における知性的形相と感覚的事物の関係に関しては、L.Brisson, *Le même et l'autre dans la structure ontologique du Timée de Platon: un commentaire systématique du Timée de Platon*, 2^e éd., Academia, 1994, pp.128-130も参照されたい。

5) この点に関しては、たとえば『国家』第10巻における寝椅子の製作の議論を参照のこと。その個所でプラトンは、寝椅子作りの職人が作るのは、「まさに寝椅子であるところのもの」つまり寝椅子の〈実相〉(アイデア)ではなく、或る特定の寝椅子であり、この個物としての寝椅子は、「〈あるもの〉に似てはいるけれども、ほんとうにあるのではないような何か」であり、「完全にあり」とは言われないものであって、「真実にくらべれば、何かぼんやりとした存在にすぎない」(597A)と述べている。

6) このギリシア語は、共同体・民衆のために働く人、職人、製作者といった意味を持つ言葉である。なお、『ティマイオス』の中のこの語は、l'ouvrier (Riveau, Martin), the maker (Cornford), the Artificer (Archer-Hind), the creator, the artificer (Jowett)などと訳されている。種山訳は「製作者」である。

7) 言うまでもなく、今でも惑星は神の名で呼ばれている。木星がジュピターすなわちゼウスであるように。

8) このように、永遠に関しては、「始めも終わりもないもの」という捉え方が最も基本的であると思われるが、これを徹底させると、「時間の外にあるもの」という捉え方が生まれてくるであろう。この考え方の端緒はポエティウスにあると思われる。たとえば彼は次のように述べている。「永遠は限りなき生命の全体的同時的かつ完全なる所有であり、このことは時間的なものとの比較によってより明瞭になる。というのも、時間の中で生きているものは何であれ、現に在るものとして過去から未来へと進んでゆき、時間の中には、その生命の期間全体を同時に包括することのできるような確固としたものが何もないからである」(Boethius, *Consolatio philosophiae*, Liber V, Prosa VI, 9-15 [Loeb Classical Library, English translation by S.J.Tester, 1973])。つまりポエティウスは、果てしなく続く時間経過の全体を把握するには、時間の外に立つ必要があり、それが永遠と呼ばれるものなのだと考えていると言ってよいであろう。なおこ

の点に関しては、A.Lalande, *Vocabulaire technique et critique de la philosophie*, 15^e éd., 1985 (1^{re} éd., 1926), P.U.F. の“Éternité”の項目を参照。

- 9) 『法律』では、軸を中心とした車輪の回転運動のように、一つの場所で回っている運動について、次のように記されている。「この回転運動においては、〔中心から最も遠い位置にある〕最大の円と、〔中心に最も近い位置にある〕最小の円とが同時に描かれながら、それに比例して、そのような運動そのものは、小さなものと大きなものとに分かれるし、またその速度も、それに応じて大きなものと小さなものができることを、われわれは知っているね。そしてまさにそのことのゆえに、その運動は、あらゆる驚嘆すべき現象の源になっているわけなのだ。大きな円と小さな円とに、それぞれ釣り合った遅い速度と速い速度をあたえながら、それらを同時に動かしているのだから——」（第10巻893C—D、森進一・池田美恵・加来彰俊訳）。そして、この回転運動が知性に割り振られ、それは「規則的で様なる運動を、同じ場所で、同じ中心をめぐって、同じものとの関係で、一つの理法と一つの規則とに従って行なっている」（898A—B）とされる。
- 10) パルメニデスの次の議論を参照されたい（内山勝利編『ソクラテス以前哲学者断片集 第Ⅱ分冊』岩波書店、1997年、86—91頁〔藤沢令夫・内山勝利訳〕）。すなわち、あるものは、「あらゆる方向において完結していて、譬えて言えばまんまるい球の塊りのようなもの、まん中からあらゆる方向に均等を保つ」（断片8、42—44）のであって、「それはあらゆる方向において自分自身と等しく、限界の中で一様同質の在り方を保つ」（断片8、49）ものである。
- 11) 『ティマイオス』にあっては、宇宙の魂は、「存在（οὐσία）」「同（ταυτό）」「異（ἕτερον）」（35A）という3つの構成要素からなると考えられており、「それら3つの部分つまり「同」および「異」という本性ならびに「存在」とから混ぜ合わされ、また比率に従って分割され結合されている」（37A）のであって、この「同」と「異」に応じて回転運動を行なうとされる。この魂の運動は当然、宇宙そのものの運動となるが、岩波版プラトン全集の注によると（45頁）、「同」の運動は天球の日周運動を、「異」の運動は惑星の年周運動をさす。
- 12) F.M.Cornford, *Plato's Cosmology*, p.117.
- 13) 日常生活における時間の意味については、土屋賢二「時間概念の原型——プラトンとアリストテレスの時間概念——」（『新岩波講座 哲学7 トポス 空間 時間』1985年、岩波書店、36—67頁）を参照されたい。
- 14) ハイデガーは『存在と時間』第6章第81節で、彼独自の立場から、通俗的な時間了解内容にあっては、諸々の今は、並列されて純然たる継起を形成し、また、事物的に存在していると解されているとしたうえで、次のように述べている。「われわれはこう言う、どの今においても今は存在しており、どの今においても今はいちはやく消滅する、と。どの今においても今は今なのであり、したがって自同的なものとして不断

に現存しつつあるのだが、たとえどの今においてもそのつど別の今が到着しつつ消滅するとしても、そうなのである。このように交替するものでありながらも、やはり同時にどの今も、おのれ自身の不断の現存性を示しているので、そこですでにプラトンは、発生し・過ぎ去る今連続としての時間にこのような眼差しを向けたさいに、時間を永遠の模像と名づけるをえなかったのである」（原佑・渡辺二郎訳、中央公論社、1971年、644頁）。

- 15) テイラーは宇宙が全時間にわたってあったし、あるし、あるだろうという言葉をごく解釈している。「言われていることは単純で、時間のどんな時点においても、現在の出来事は、過去の出来事がそれに先立っていたのであり、また、未来の出来事がその後が続くだろうということである。すなわち、最初の出来事など一度もなかったのであり、また、最後の出来事もけっしてないだろうということである」（A.E.Taylor, *A Commentary on Plato's Timaeus*, p.190）。また、次のようにも述べている。「はっきりしているのは、私たちは永遠を、始めも終わりもない引き伸ばされた継起とみなしてはならないということである。この始めも終わりもない引き伸ばされた継起もまたまさしく時間であるということになろう、つまり、果てしなく続く出来事が示す「移りゆき（passing）」であるということになるであろうし、ティマイオスは私たちに、「推移（passage）」は「生成する（becomes）」ものにしか属しないと語っているのである。そのような継起は、果てしないものではあるけれども、「永遠の動く似像」に過ぎないのであり、永遠それ自体ではない」（*ibid.*, p.679）。つまりテイラーは、プラトンの言う永遠を写す動く似像としての時間を、始めも終わりもない「持続」といった意味に解しているわけで、その点では時間を永続的持続と見てよいが、しかし、この時間および宇宙にはまさに端的な始まりがあったということ、そのことが考慮に入れられなければならない。この宇宙および時間に端的な始まりがあるからこそ、宇宙も時間も解体可能性を内包してしまうのである。
- 16) ちなみにポエティウスは、神の現在と人間の現在を区別して、人間における今は、変化する時間と永続性（sempiternitas）を内包するが、神の今は不変であり、動くことも動かされることもなく、永遠性（aeternitas）を実現しているとする（Boethius, *Quomodo trinitas unus deus ac non tres dii*, IV, 69-77〔Loeb Classical Library, English translation by H.F.Stewart et al., 1973〕）。つまりプラトンの言え、神の現在は「ある」ものであるが、人間の現在はそこに「あった」と「あるだろう」が入り込むということである。そして彼は、神は永遠であるが、この世界は永続的（perpetuus）であると考え（*Id.*, *Consolatio philosophiae*, Liber V, Prosa VI, 57-59〔Loeb Classical Library〕）。